

2025年度
東大・国立選抜【iP class(東大専科)】試験

国 語

時間 50 分、100 点満点

受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入すること。
2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入すること。
記入方法を誤ると得点にならない。
3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも回収される。

郁文館高等学校

著作権の関係により、問題の一部を非公開としています。

著作権の関係により非公開としています

著作権の関係により非公開としています

著作権の関係により非公開としています

著作権の関係により非公開としています

著作権の関係により非公開としています

□ 次の文章は川端康成の「油」（一九二五年発表）という小説である。この文章を読み、後の間に答えなさい。表記は出版時のものに依った。

父は私の三歳の時死に、翌年母が死んだので、両親のことは何一つ覚えていない。母はその写真も残っていない。父は美しかったから写真が好きだったのかもしれないが、私が古里の家を売った時に土蔵の中で、いろんな年齢のを三四十種も見つけた。そして中学の寄宿舎にいた頃には一番美しく写った一枚を机の上に飾つたりして、いたこともあつたが、その後aイクドも身の置きどころを変えるうちに、一枚残らず失つてしまつた。写真を見たつて何も思い出すことがないから、これが自分の父だと想像しても実感が伴わないので。父や母の話をいろんな人から聞かされても、親しい人の噂という気が矢張りしないので、直ぐ忘れてしまう。

私が高等学校に入学して東京に来ると、十何年振りで会つた伯母が私の成人を驚いて言つた。

「親はなくとも子は育つ。お父さんやお母さんが生きていたらどんなに喜ぶだろうね。お父さんやお母さんが死んだ時には、無理を言って困つた。私の前で叩く鉦の音を大変嫌がつて、その音を聞くと泣きむずかるもんだから、鉦は叩かないことにしたんだよ。その上仏壇の※1燈明を消せと言うんだもの。消すばかりでなしに、蠟燭を折つてしまふし、※2かわらけの油を庭に流してしまふまで、疳を鎮めないんだからね。お父さんの葬式にはお母さんが泣いて怒つていた。」

従姉から聞いたような、父の葬式で家が賑かになつたのを私が喜んでいたことや、また、棺に釘を打たせまいとしたことも、ちつとも覚えていない。ところが、伯母の話には、ちらが忘れていた幼な友だちに声を掛けられたような親しみを感じた。かわらけを持ち手を油で汚している幼い私の泣面が浮んで来た。この話を聞くと直ぐに古里の庭の※3木斛の木が私の心に見えた。十六七まで毎日私はその木に登り、幹の上へ猿のよう^{こほ}に坐つて本を読んでいたのだつた。

「油を零^{こぼ}したのは、あの木斛と向い合つたbザシキの縁側の手洗鉢^{ちょううすばち}の横だつた。」などといふことまで思い出した。しかし考えると、父母の死んだのは大阪の近くの淀川べりの家だ。今思い描くのは淀川から四五里北の山村の家の縁先だ。父母が死ぬと間もなく淀川べりの家を毀^{こわ}して古里へ帰つたので、川べりの家のことは少しも覚えていないから、油を零したのも山の家らしく思われるのだろう。それから、場所も手洗鉢の横とは限らないし、かわらけは私の手にあるよりも母や祖母が持つてゐるほうが自然である。また、父の時と母の時との二度が一度として、或は同じことの繰り返しとしてしか思い浮べられない。細かいことは伯母も忘れている。私が記憶と思うものは多分空想なのだろう。しかし私の感情は却つてこの怪しいなり曲つたなりを真実として懐しみ、人聞きなのを忘れて自分の直接の記憶であるかのような親しみを感じている。

—— この話は生命あるかのように不思議な働きを私の上に加えた。

父母の死の三四年後に祖母が死んだ時とか、またその三四年後に姉が死んだ時とか、そのほか、折々私を仏壇に礼拝させる度毎に、祖父は必ず※4燈心^{たひご}の灯を蠟燭につけ変える習慣だった。このことは伯母の話を耳にするまで、なぜ祖父がそうするのかと訝^{いぶか}らずに、ただその事柄として頭に残つていた。私は何も生來鉢の音とか油の灯とかが嫌いだったのではあるまい。祖母や姉の葬式の時分には、父や母の葬式に油を捨てさせたことを忘れて、燈心の燈明でも平氣でいたかもしれない。しかし、祖父は油の燈明を私に礼拝させはしなかつた。そして伯母の話を聞いて初めて私は、このことのうちに含まれた①祖父の悲しみを知ることが出来たのだった。—— 可笑しいことには伯母の話によると私は父母の葬式に蠟燭を折

り油を庭に流したのに、祖父は明りを蠟燭に移している。私も油を流したのはほんやりと思い浮ぶが、蠟燭を折ったのはちっとも覚えていない。蠟燭のほうは多分伯母が記憶の誤りか話の調子で誇張したのだろう。また祖父は仏前の油の方こそ私に見せなかつたが、私が中学に入る頃まで二人は油の灯で暮していたのだつた。祖父は自分が半盲で明るくても暗くても大した変りがないために、古風の行燈を石油ランプ代りに使つていたのだ。

私は虚弱な父の体質を受けた上に※5月足らずで生れたので、cセイイクの見込みがないように見えた。小学に通う頃まで米の飯を食べないような有様だつた。嫌いな食物が多い中でも、※6菜種油の臭いのする物を口に入れると、きまつて吐いた。小さい時dケイランの焼いたのは※7落焼でも※8巻焼でも非常に好きだつたが、焼く時鍋に菜種油を引くことを思うと、焼けてから臭いがしなくて嫌だつた。鍋についていた表面をきつと祖母か女中かに剥かせてから食べた。食の進まない私のために、この面倒は毎日繰り返されていた。またある時、行燈の油が一滴沁みた着物をなんと言われても一度と着ようとせず、そこを切り抜きつぎを当てさせてから、やつと気味悪そうに手を通したことがあつた。今日まで私は油臭いのに敏感だつた。単純に油の臭いが嫌いのつもりでいた。しかし伯母の話を聞いて初めて私は、このことのうちに含まれた私の悲しみを知ることが出来たのだった。仏前の油の灯を嫌がつた私に父母の死は油の臭いとして沁み込んでいたのかも知れないのだ。また油嫌いの我儘を許してくれた祖父母の気持も、伯母の話から初めて想像出来たというものだ。

私も少年時代には、父の写真を机の上に飾つていたように、「孤児の悲哀」を甘い涙で悲しみ、それを訴える手紙を男や女の友だちに書いた。

しかし間もなく、孤児の悲哀が何物だか少しも分つていらない、と言うよりも、分るはずがないのだと省るようになった。両親が生きていたらこうだが、死んだからこうだつたのだと、この二つのことがはつきり分つてこそ孤児の悲しみだが、事実死んでいるのだから、生きていたらどうだつたかは神だけが知っているのだ。若し生きていたら更に不幸なことがなかつたとも限らないではないか。それなら顔も知らない父母の死のために流す甘い涙は幼稚な感傷の遊戯なのだ。しかし痛手にはちがいない。この痛手は自分が年を取つて一生を振り返つた時に初めてはつきりするだろう。その時までは、②感情の因習や物語の模倣で悲しむものかと思つた。

そして私の心は張りつめていた。

しかし、そうした③意氣張りが却つて私をいびつなものにしていることを、高等学校の寄宿寮で私の生活が自由にのびのびとして来た頃から気づき始めた。そうした心が私の心の傷や弱身をA意固地にかばうほうにばかり働いていたのだ。悲しむべきを素直に悲しみ、寂しむべきを素直に寂しみ、その素直さを通してその悲しみや寂しみを癒すことの邪魔をしていたのだ。前々から私は、明らかに幼い時から肉親の愛を受けないことに原因している恥ずべき心や行を認めて人生が真暗になることが度々ある。そんな場合、「ええい」と投げ出したくなる心持を殺し、静かに自分を哀むように傾いて来た。劇場や公園やいろんな場所で幸福な家庭の親兄姉に連れられた子供とか、子供らしい子供同士でいるのとくに、何気なく見惚れ、見惚れている自分を見出してほろりとし、ほろりとする自分を見出して、「馬鹿」と叱ることがあつた。しかし、その叱る自分がいけないのだと思うようになつた。

父の三四十枚の写真を何時となくすっかりなくしてしまつたように、死んだ肉親などにはこだわらなくなればいいのだ。孤児根性が自分にあるなぞと反省しなければいいのだ。

「まことに美しい魂を自分は持つてゐる。」

ひそかに抱いているこの気持を余計な反省の蔭にいじけさせずにB野放図^{のかげ}に青空へ解放してやればいいのだ。こんな風な気持で二十歳の私は人生の明るい広場へ出て来た。幸福に近づきつあるような気がして来た。ちょっとした幸福にも我ながら呆れるほど有頂天になるようになつてきた。私は自分に問うのだ。

「これでいいのか。」

「幼少年時代を幼少年らしく過ぎなかつたのだから、今は子供のように喜んでよろしい。」

こう答えて自分を見逃してやるのだ。やがて来る素晴らしい幸福一つで、私は孤児根性からすっかり洗われそうにさえ思える。永い病院生活を逃れた予後の人^の人が初めて目にする緑の野のよう^のに、その時は人生が見えるだろ^ううと待ち遠しい。

こんな風に氣持が移つて來た私には、伯母からの話を聞き、あれらのことを思い当つたeジュンカン^{eジュンカン}が生きていた。父母の死で受けた痛みの一つからC忽然^{こうぜん}助かつたなど直覺したからだ。ためしに、④菜種油臭いものを食べてみようと思^う立つた。そして不思議に食べられるようになつた。菜種油を買って来て指先につけ、なめてみたりした。臭いも敏感に鼻に来るが氣にならなくなつた。

「この調子。この調子。」と私は叫ぶ。

この変化もいろんな風に考えられる。父母の死とはなんの関係もなく生来油が嫌いだったのに、助かつたなど喜ぶ心が打ち勝つて、なんでもなくなつたとも言える。しかし、父母の死を悲しむ心がふと仏前の燈明に宿り、その油を庭に棄てたことから油を憎むようになり、その因果関係を忘れながらも油を嫌つていたのが、父母の話で偶然原因と結果とが結びついたためだと、無理にも言いたい。

「油からだけは助かりましたよ。」と、痛手の一つを實に明かに癒した証拠として⑤信じたいのだ。

幼い時肉親達に死別したことが私に与えた影響は、私が人の夫となり人の親となり、肉親達に取り囲まれるまで消えるはずがないとも考える。不斷の淨心も大切だ。しかし、この油のよう^のにひよいとした機会で、私の心のいびつか助かることも、第二第三と続かないとも限らないだらうと望んでいる。

人並の健康になり、長生きし、魂を高く發展させて、自分一生の仕事を果したい希望が増々強く働いてゐる。油のことで浮き浮きした拍子に、身体のため肝油^{みょうう}を飲んでやろうと微笑み、この油臭いものが毎日咽を通るようになつた。しかも飲む度に、亡き肉親達の冥護^{みょうご}が私の身に加わつてゐるような氣さえする。祖父も死んでから十年近くなる。

「⑥明るくなりましたね。」こう言つて、親達の仏前に油の※9御百燈^{ごひゃくとう}を花々と獻じてやりたいものだ。

「油」（川端康成）より

語注

- ※1 燈明：神仏に供えるともしび。昔は油を使い、油皿を用いて火をともした。現在はろうそくや電球が一般的。
- ※2 かわらけ：素焼きの杯のこと^{こと}で、ここでは燈明をともす油皿のこと。
- ※3 木斛：ツバキ科の常緑高木。※4 燈心：燈明の火をともす芯。
- ※5 月足らずで生れた：胎児が母親の胎内に十カ月に満たず^{たゞ}に生まれてくること。
- ※6 菜種油：菜の花の種子から作った油。行燈用や食用の油となる。※7 落焼：目玉焼きのこと。
- ※8 卷焼：現在のたまご焼き。※9 御百燈：数多くの燈明をつけて靈を供養すること。

問一 波線部 a～e のカタカナを漢字にしなさい。

問二 傍線部A「意固地に」、B「野放図に」、C「忽然」の本文中における意味として最も適切なもの記号で選びなさい。

A 「意固地に」

- 1 恃意的に
- 2 執拗に
- 3 陰湿に
- 4 こつそりと
- 5 殊更に

B 「野放図に」

- 1 生意氣にも
- 2 何も考えず
- 3 嬉々として
- 4 勝手気ままに
- 5 殊勝にも

C 「忽然」

- 1 急に沸き起ころる様子
- 2 運がよい様子
- 3 めったにない様子
- 4 不思議な様子
- 5 安堵した様子

問三 傍線部①「祖父の悲しみを知ることが出来たのだつた」とあるが、「私」は祖父のどんなことを知つたのか、最も適切なものを記号で選びなさい。

- 1 祖父がいつも燈心の火を蠅燭につけえたのは、祖父が半盲で明るくとも暗くとも大した変わりがないために、蠅燭の火で十分だという祖父の老いと病弱さのためだつたという悲しい事実を知つた。
- 2 祖父が油をさした燈明を「私」に礼拝させなかつたのは、「私」の父母、そして姉が次々と亡くなつていき、祖父の唯一の肉親である「私」のわがままを許そうという祖父自身の孤独な思いのおかげだということを知つた。
- 3 祖父が「私」に油をさした燈明を礼拝させなかつたのは、燈明の油のにおいが父母の死を思いさせ、「私」を苦しめることがないようにという祖父の悲しいまでの思いやりのおかげだということを知つた。
- 4 祖父が燈心の火を蠅燭につけ変えて、決して「私」に燈明を礼拝させなかつたのは、「私」が父母の葬式で燈明を消せと泣き騒いだのを祖父が記憶し、孫のためにいつまでもそれを忘れずにいた愛情のおかげだということを知つた。

5 祖父が「私」に燈明の火を礼拝させなかつたのは、「私」がもともと油のにおいが嫌いだつたために、食事も衣服も油くさいものなら何でも我慢できない幼い「私」のわがままを許す祖父の優しさのおかげだつたことを知つた。

問四 傍線部②「感情の因習や物語の模倣」とあるが、これによつて「私」がとつた行動を本文から十八字で抜き出しなさい。

問五 傍線部③「意気張り」とは「私」のどんな心情のことか、最も適切なものを記号で選びなさい。

- 1 兩親が生きていたらこうだ、ああだと論じる世間の勝手な言い分に対し、兩親は實際死んでいるのだから、生きていたらという仮定は成り立たないだろうという強い反発。
- 2 兩親が死んだ悲しみを背負い他の幸福な家庭の親兄弟に連れられた子供に見とれた自分を嫌悪し、嫌悪した自分をさらに叱るといういつまでも自己撞着から抜け出られない激しいいらだち。
- 3 兩親が死んでしまつたことの孤児の悲哀により、思わず甘い涙が流れるのをぐつとこらえて、自分は幸福に近づきつつあると思い込もうとするかたくなな心。
- 4 父母のいない孤児は哀れな存在だという世間の思い込みや固定観念を真に受けて、自分で自分を憐れみ、父母のいないことを悲しむことは絶対にするまいという強い覚悟。
- 5 いつか大人になつて一生を振り返れば、父母がいないことを悲しむ孤児の涙は幼い子供にとつて当然のことだつたと思うだらうという未来への予測。

問六 傍線部④「菜種油臭いものを食べてみようと思つた」とあるが、なぜそんなことを思い立つたのか、その理由として最も適切なものを記号で選びなさい。

- 1 油臭さは父母の死と結びつき、「私」の心の痛手の象徴であつたため、敢えて菜種油臭いものを食べることで、本当に孤児根性から解放されたのかを確認するよい機会だつたから。
- 2 油のにおいと父母の死に因果関係があるのかどうかは實際には不明なので、實際に食べてみて生來油が嫌いだつたのか、父母の死を悼む心によつて油を嫌いになつたかを確認しようと思つたら。
- 3 父母の葬式でかわらけの油を捨ててしまつたかすかな思い出にずっと苦しめられてきたため、菜種油臭いものを食べることができれば、その思い出を乗り越えられると思つたから。
- 4 子供のころ虚弱体質で菜種油のにおいのするものを食べると必ず吐いていたために、大人になつた今や子供のころの食べ物への好き嫌いがなくなつたかを確認するよい機会だつたから。
- 5 油は父母の葬式のかすかな思い出であり、「私」の孤児の悲哀そのものであつたため、敢えて菜種油臭いものを食べることによつて、その孤児としての暗い記憶を葬り去ろうと思つたから。

問七 傍線部⑤「信じたい」とあるが、その理由を六十字以内で答えなさい。

問八

傍線部⑥「明るくなりましたね」とあるが、この言葉から「私」のどんな心情を読み取ることがで
きるか、最も適切なものを記号で選びなさい。

- 1 半盲でありながら幼い自分を育てくれた祖父がなくなつて十年近くなり、父母の葬式の記憶と
結びつく油を幼い「私」の身の回りから排除してくれた祖父の肉親としての優しさに改めて感謝し
たいという思い。
- 2 自分は今まで孤児根性で卑屈に悩んでばかりいた憂鬱な人間ではなくなり、明るい人間になり、作
家としての一生の仕事に邁進していきたいという希望を亡くなつた肉親たちに顕示したいとい
う思い。
- 3 今では菜種油どころか、健康に良く油臭い肝油さえ飲み干すことができるようになり、これも今は
亡くなつてしまつた肉親や祖父たちの御加護のおかげであると、自分の健康と幸福を報告したい
という思い。
- 4 幼少時に肉親と死別したことによる深い影響から自分は内向的で悲観的な人間だと思い込んでい
たが、伯母の話から実際は明るく活発な面があることを知り、それも亡くなつた肉親達のおかげか
もしれないという思い。
- 5 孤児根性という甘くも幼い自己憐憫や、父母の死の象徴である油のにおいからも解放され、明るく
幸福な感情を抱くことが出来るようになったのも亡くなつた父母や育てくれた祖父のおかげだ
と感謝したいという思い。

問題はこのページで終わりである。

このページに問題はない

